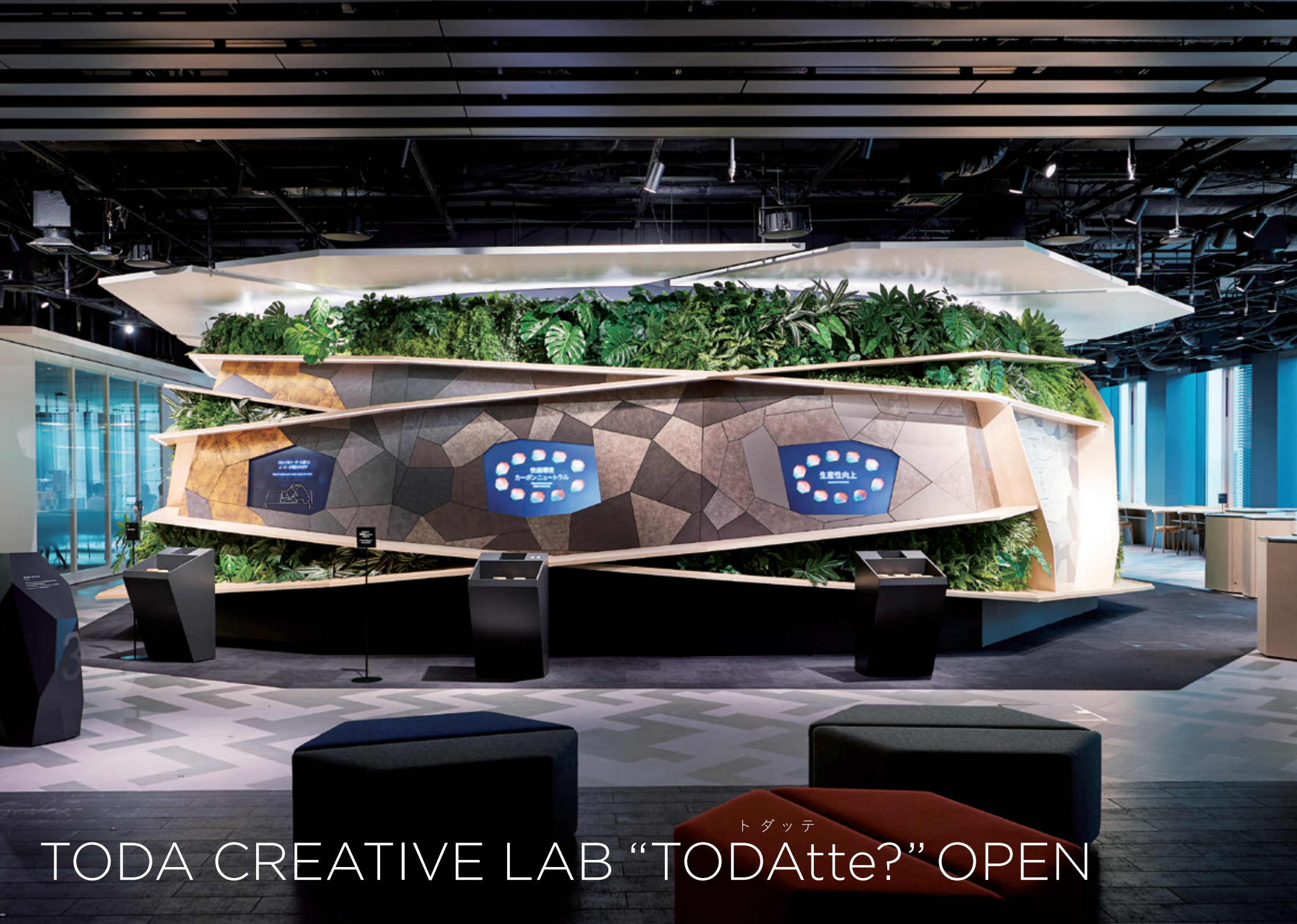


TODA CASE 2025





TODA CREATIVE LAB “TODAtte?” OPEN

トダッテ



私たちが生きるこの時代は、人口減少等による社会問題の顕在化、産業構造の高度化、テクノロジーの急速な発展により、世界の変化は予測できないものになっています。次々に浮き彫りになる社会課題に対して、生活者個人やコミュニティへ価値を提供するため、垣根を超えた協業が企業にとって不可欠となります。そのような未来に向けて、当社グループは、2031年の創業150周年を見据え、生活者と企業を繋げるゲートキーパーの役割を担い、多様な価値を創出し、共創社会の実現に取り組む存在を目指して「未来ビジョンCX150」を掲げました。2024年11月に開業したTODA BUILDINGは8階のミュージアムをはじめ、当社グループが想い描く未来をステークホルダーに伝える情報発信拠点としての役割も担っています。

今回の TODA CASE 第二弾でご紹介する事例も、私たちが目指す未来の姿に繋がっています。国内トップレベルの耐震性能が支える地域防災、最新の工法で切り開く防災トンネル、浮体式洋上風力発電が目指すゼロエミッション、企業の垣根を超えた地方創生事業。これらはすべて、私たちが描く未来の一部です。私たちは日々、情熱やアイデアをもった社員と様々なパートナー、生活者と一緒に、より良い未来を想像し「ものづくり」に取り組んでいます。

代表取締役社長 大谷清介





災害に強いビルは
地域防災の拠点にもなりうる



パブリックアートプログラム「APK PUBLIC Vol.1」展示風景

CASE 05 戸田建設新本社ビル

TODA BUILDING

2024年9月に竣工、11月に開業した「TODA BUILDING」は、戸田建設の新しい本社を含むオフィス、芸術文化施設や商業施設が入る超高層複合用途ビル。国内トップレベルの耐震性能を実現するため、コアウォール免震構造を採用し、有事の際は、帰宅困難者の一時滞留スペースや一時滞在施設としても機能するなど、隣接街区と一体での「地域の防災力強化」を掲げている。



街の役に立ちたい、という思いは、開発の計画以前から、戸田建設の中に脈々とあったと思います。建設業の成り立ちを紐解けば、もともと有事の際の防災の担い手だったわけですから。京橋に120年以上拠点を構える総合建設会社が、次の100年を見据えたビルを建てるなら、どこよりも強いビルにしなければならない。建物だけでなく人を支え、街の安全に貢献したい。そのため、耐震性だけに留まらず、事業継続計画（BCP）を支える様々な性能を備えています。中央通り側の広場は、災害時、帰宅困難者の



京橋プロジェクト推進部 竹下佳奈

一時滞留スペースになります。備蓄品を使う手順など、「もしも」の時の運用計画・ソフト開発も今回の挑戦のひとつです。当社のアート事業や街区一体で取り組んでいる「京橋彩区エリアマネジメント」も、地域との顔の見える関係作りという意味では、防災の一助となります。大切なのは、働く人、訪れる人、街の人をどう支えていくか、一人ひとりが自分の分野でできることを丁寧に考えていくこと。ハードとソフト、地域との日常的なつながりで、街の防災力に貢献していきたいと思っています。



Vision

「もしも」の時を
地域一体で支えたい。



京橋プロジェクト推進部 越部豪

Technology

高い耐震性能と
開放的な空間の両立。



設計部門 川又哲也



超高層ビルは制震構造で建てられるのが一般的ですが、「TODA BUILDING」はコアウォール免震構造で、国内トップレベルの耐震性能を実現しています。地震発生時の変形と地震後の後揺れを大幅に低減。ビル単体のみならず、敷地全体を免震構造とし、広場を含めた建物内外の安全性能を高めています。その高い耐震性を支えているのが、コアウォール。技術的には、非常に難しい試みでした。設計も現場も、何から何まで初めての挑戦。誰も手がけたことがないと思います。ここまで建てる



のが難しいビルは。でも全部やり切って、開業を迎えることができた。この経験は、今後の私たちの大きな強みになるでしょう。コアウォールは、魅力的な空間づくりの要にもなっています。「建物の芯棒」であるコアウォールが地震力を受け持ってくれることで、高層部の事務所フロアは柱を細くすることができ、低層部は大胆な吹き抜けの連続、開放的な空間を自由に設計することができました。外観も京橋という風格のある街に溶け込む、軽やかなものになっていると思います。



設計部門 中川康弘



中央区はその名が示す通り、東京 23 区の中央に位置し、乗降客の多い駅がいくつもあります。見どころが多く、国内外から日々、たくさんの来街者がいらっしゃる。もし災害があった際、その方々にどこで過ごしていただくのか。大きな地震が起きた時、発災から混乱が収まるまでの安心を、どこでどう提供できるのか。それがとても大きな課題になっています。

「TODA BUILDING」では、中央通りに面する広場の1,400m²を災害時の帰宅困難者の一時滞留スペースに、屋内の1,250m²を一時滞在施



中央区都市整備部
まちづくり事業担当課長 福島真一郎



Another Perspective
東京の中心で
街も人も守る。



設とし、水や食料などを収める防災備蓄倉庫も整備していただきました。これにより地域の帰宅困難者対策は大きく前進したと思っています。「帰宅困難者支援施設運営協議会」にも参加していただき、訓練なども行っています。街に対して何か貢献できないか、と戸田建設さんからご提案いただくこともあります。新しく生まれ変わった建物をみんなのために使いたい。そう思ってくださいる方々が、同じ街にいる。区として、とても心強く感じています。





地方の暮らしを守る
多機能バイパスを
最新の工法で実現する



Vision

待ちに待った命の道。
未来に続く暮らしの道。

木与防災は「命の道」。計画区域は、過去に何度も土砂崩れがあった場所なんです。大雨などによる事前通行規制区間でもあり、1本しかない国道が通行止めになるたび、住民の方々は難儀をされてきました。大きな病院まで車で救急搬送をされるにしても、迂回するとすると、普段よりずっと時間がかかる。通行規制区間を回避できる道の整備は悲願でしたから、やっと願い叶っての着工。完成を心待ちにしています。阿武町の主な産業は、農業や漁業、畜産業といった一次産業です。安全で走行性の高い道



阿武町議会議長(山口県) 末若憲二

山口県下関市と広島県広島市を結ぶ一般国道191号の事前通行規制区間を回避し、緊急時の代替路ともなる「木与防災」。戸田建設では、山口県阿武郡阿武町の木与から宇田までの延長5.1kmのうち、最も長い「(仮称)木与第1トンネル」の工事を進めている。この工事に、覆工コンクリートの自動打設ロボット「セントルフューチャーズ™」を初めて導入。住民悲願の多機能バイパスに、最新の工法で挑む。



路が整備されれば、農水産物の出荷にも弾みがつきます。また、町内から萩市へ車で働きに行っている人も多いのですが、迂回の心配がなくなり、通勤も楽になります。つまり木与防災は、地域経済の活性化や生活を支える「暮らしの道」でもある。ゆくゆく山陰道とつながれば、若い方々が移住を考える時にもずいぶん違うと思うんですね。町の魅力はたくさんあります。交通の利便性が上がれば、広島方面や九州地方からレジャーや観光に来る方も増えるのではないか。そんな期待も膨らんでいます。

木与防災の「木与第1トンネル」で初めて導入した覆工コンクリートの自動打設ロボット「セントルフューチャーズ™」。その最も大きな特徴は、オリジナルの配管切り替え装置が、普通の硬さのコンクリートでも使える、ということです。中流動でも高流動でもなく、一般的なトンネル工事で最も多く使われるコンクリートで自動打設に成功したのは、国内で初めてです。将来的な汎用性を考えると、普通のコンクリートが使えるほうが絶対がいい。覆工コンクリートの打設が自動化できれば、作



営業部門(プロジェクトマネージャー) 二宮伸二

Construction

初号機ゆえの
試行錯誤はいとわない。



施工部門 三宅拓也

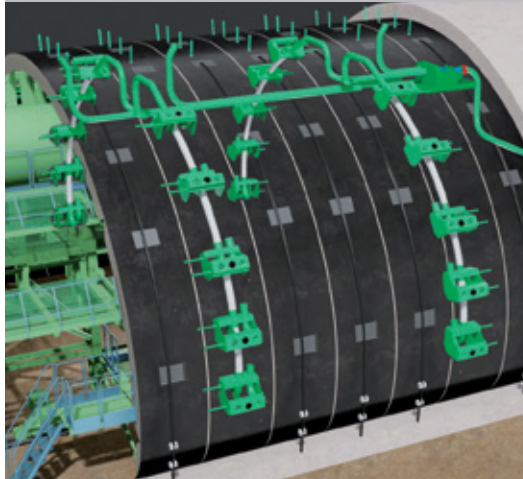
Technology

汎用性のある技術で
人員不足を解消したい。

業の効率化が図られ、工事の担い手不足の解決につながります。建設業界の人員不足は深刻で、省人化は、社会に必要なインフラ工事を担う現場の切実なニーズ。今回は「セントルフューチャーズ」の導入で、人員を今までの3分の2まで減らすことができました。あと1人でも2人でも人員を減らせるよう、自動化の余地のある部分の開発に取り組んでいます。その時に忘れてはならないのは品質。自動化したからこそ、これまで以上のクオリティーが保たれる。そんな次の時代の自動打設を目指しています。



「セントルフューチャーズ™」は初めての導入なので、運用しながらの改善は、日々、必要になります。誰でも不具合なく使えるようなものにするためにも、初号機は試行錯誤です。それは、誰かがやらなければならない。大変ですけど、個人的には最初にやるほうが好きですね。最初の1人のほうがかっこいい(笑)。現場で一番大切にしているのは、安全です。トンネル工事はひとたび事故が起きると、重大災害につながることが多い。機械化や自動化が進んでいる究極の理由も安全の確保ですよ。後方での遠隔操作だけになれば、山(切羽:トンネルの掘削面)が崩れても人の命は守られる。技術開発は簡単ではないけど、いずれそうなるのではないのでしょうか。山がおかしくなる時は、何らかのサインを出しているんです。それを見逃さず、五感全部を使って見えている山の先を読む。人工知能がもっと現場で用いられるようになったら、先々を読む助けにもなると思います。培ってきた人の経験値をAIにどう伝えていくか。自動化と共に今はその新しい時代の準備を始める時だと感じています。





新しいゼロエミッションの
可能性を地域と一体でつくる

CASE 07 浮体式洋上風力発電

PILOT FARM

長崎県五島市と戸田建設の100%子会社である五島フローティングウィンドパワーは、2016年から五島・崎山沖で浮体式洋上風力発電設備の商用運転を続けている。浮体形式は自社開発のハイブリッドスパー型。次に目指すのは、2メガワットクラス8基が並ぶ大規模発電施設「ウィンドファーム」だ。五島・福江港に建造ヤードを設け、浮体の大部分を地元で建造するなど、地域と一体での挑戦が続いている。



Vision

始まりは個人の思い。
脱炭素への強い意思。

私がこの事業に取り組み始めたのは、もう20年近く前。環境問題への危機意識は今ほど浸透していなかった頃でしたが、浮体式洋上風力発電は、再生可能エネルギーを促進し、持続可能な社会を目指すための日本の切り札になる、という確信がありました。日本は国土をぐるりと海に囲まれていますから。当初は個人的な思いが強かったですね。総合建設業の力を活かし、みんなでゼロカーボンに向かっていくんだ、という強い意思。今ではそれが、戸田建設の社員共通の思いになっていると感じています。



専務執行役員 イノベーション本部
副本部長 浅野均

長崎県五島市で進めているウィンドファームには、2メガワットの浮体式洋上風力発電設備が8基並ぶ予定です。原点は、2013年からの実証事業で生まれた「はえんかぜ」です。ウィンドファームの先には、世界で標準化されつつある15メガワットクラス超への挑戦。ハードルはかなり高く、なかなか一気に進みませんが、焦らず時間がかかっても懸命に技術開発に取り組むしかありません。持続可能な社会の実現のために、浮体式洋上風力発電が必要であるという信念が変わりはないからです。



施工部門 新川泰弘

Construction

島でつくり、島で立てる。
最後までやり遂げたい。

浮体式洋上風力発電事業を支えているのは、五島の皆さんとの関係性の素晴らしさです。ウィンドファームを進めるにあたって、地元の方々から「五島でつくれるものは、五島でつくりたい」という熱意ある要望をいただき、島の玄関口・福江港に建造ヤードをつくるに至りました。ゼロから拠点を立ち上げ、建造方法自体を検討しながら、この特殊な工事を風車完成まで、五島で。正直なところ最初は不安のほうが大きかった。でも、会社として決断できたのは、これまで共に歩んできた地元の願いに応えたい、という思いもあったからだと思います。

一昨年、浮体構造部に不具合が見つかった時は、精神的に堪えました。忘れられないのは、地元の方々にご説明とお詫びに伺った時のこと。大変やね、でも頑張ってね、と。絶対に最後までやらないかんよ、と言われたことも。勇気付けられました。島では、ウィンドファームで生まれる電力を見越した「ゼロカーボンシティ計画」も公表されています。期待してくれています。その期待に応え、地域の皆さんと一緒に最後までやり遂げたいと思っています。



Another Perspective

目指すのは、100%
再生エネルギーの島。

洋上風力発電は五島市のシンボル。再生可能エネルギーの普及を見据え、2018年には地域の電力会社でもできました。それを基に、五島産の電気を使う企業を応援する制度「五島版 RE100」がスタート。現在40団体が認定されています。市としても23年に、「ゼロカーボンシティ計画」を公表。五島市は人口約35,000人の離島ですが、再エネ・環境対策においては先進地。洋上風力発電はその要ですから。ウィンドファームにも市民全員が期待を寄せているところです。地球温暖化は深刻な問題です。再エネ促進に



五島市総務企画部 未来創造課 課長 村井靖孝

少しでも協力したいという考えを持った漁師の方もおられます。大きかったのは当時の漁協組合長が、この事業は漁業活性化のチャンスだと、熱心に取り組んでくださったこと。浮体が魚礁となり、「海洋牧場」になる可能性がある。五島には自然しかないと言っていたのですが、今は恵まれた自然資源があると、胸を張って言えます。海があって風があるから洋上風力発電がある。じっくりと腰を据え、再生可能エネルギーによる島の発展に希望をもって取り組みたい。



NAGASAKI

STADIUM CITY

CASE 08 長崎スタジアムシティ HAPPINESS ARENA/STADIUM CITY NORTH



企業という垣根を超えて
地方創生に貢献する



Vision

事業主の本気に
全力で応える。

最初にジャパネットさんにお会いした時、一緒にワクワクするような施設をつくるパートナーを選びたい、とおっしゃったんです。戸田建設はワクワクする建物をつくれます、私たちとだったらワクワクしてプロジェクトを進めることができます。そうプレゼンでお約束し、実際に最初から最後まで、その約束を貫けたと思います。ジャパネットさんは民間主導の地域創生を掲げ、「長崎スタジアムシティ」を立ち上げた。それが本気なんだ、ということが、ひしひしと伝わってくるんです。スポーツビジネスについても、プロ



ジャパネットホールディングスの新たな地方創生事業として注目されている「長崎スタジアムシティ」。戸田建設は、その「長崎スタジアムシティ」を構成する施設のうち、約6,000席のアリーナ(サブアリーナ含)、そして長崎県内最大規模のオフィス棟を手がけた。100年に1度の変革期を迎える長崎の、未来を切り拓くビッグプロジェクト。企業の垣根を超えたワンチームで挑み、高い評価を得ている。



営業部門 織田大介

バスケットボールクラブ「長崎ヴェルカ」を創設するなど、本気で取り組んでいる。我々はそのパートナーとして選ばれたんですから、相手が本気でつくろうと思っている施設を、建設のプロである我々が、端から難しいと言うのは、違うと思うんですね。物理的に不可能ではないのであれば、どうすればできるようになるかを考える。考え抜く。相手の本気に全力で応えよう。チーム全員にそう伝え続けた3年間でした。やっぱり「本気」が人を動かしていくんです。

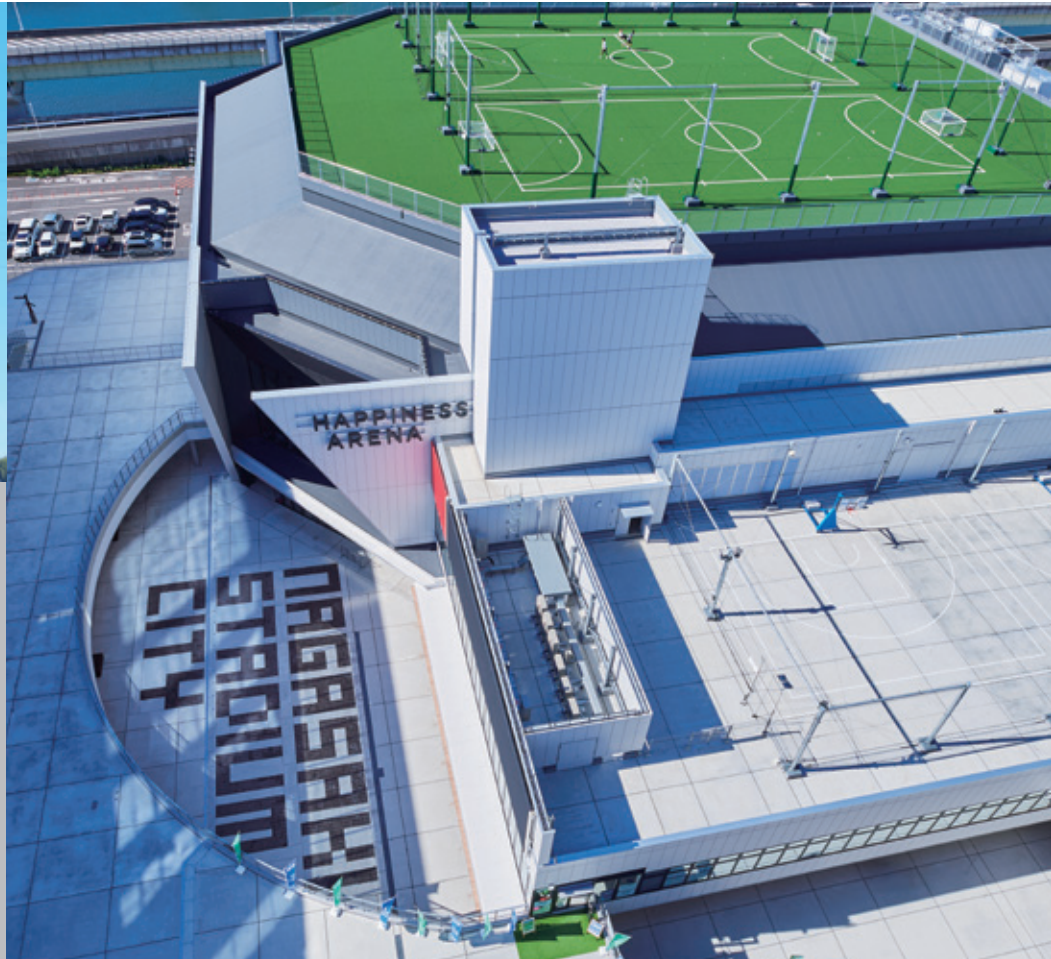


Design

想いに寄り添い実現した
日本初のジップライン。



設計部門 中田幸宏



戸田建設のいいところは、とことん「寄り添う」こと。相手の想いに対して寄り添い続け、やり遂げる。オフィス棟で印象に残っていることのひとつは、ジップラインの設計です。オフィス棟と商業棟の間にロープを架け、スタジアムの上を滑り降りる、という前代未聞のジップライン。両棟、工区が違うので他社との協働が不可欠になりますし、抛り所となる法律もない。それでも結果的に試行錯誤と行政協議を重ねて実現しました。寄り添い、諦めなければ、できる。その可能性を身をもって経験しました。



Construction

屋根ではなく強固な床。
屋上にフットサルコート。



施工部門 岡山孝治

私たちが手がけた「ハビネスアリーナ」の屋上はフットサルコートです。内部に大空間をもつアリーナの上に床をつくる。しかもただの床ではなく、競技が行える運動場にする。設計、施工共に難易度が高く、アリーナ単体の屋上に運動場を作ったのは、国内初です。平地の少ない長崎の土地事情や収益の見通し、地域創生の可能性など、ジャパネットさんが描くビジョンは明確でした。そのビジョンをチームで共有してこそ実現できたと思います。屋上のコンクリート打設が完成した日は今でも忘れられません。



ジャパネットグループが「長崎スタジアムシティ」を立ち上げた原点は、長崎を元気にしたい、という思いです。長崎から生まれた企業として、ひとつでも何か地元に戻返しがしたい。キーワードは「感動とビジネスの両立」。スポーツ施設を中心に複合的な街づくりを行い、地域創生事業のモデルケースになりたい。戸田建設さんには、私たちのその「大きな夢」を共通の目標として歩んでいただけたと感じています。プロジェクトがうまく行くか否かは、結局、人と人との関係性だと思うんです。同じ社内だと信



株式会社リージョナルクリエーション長崎
執行役員 折目裕



Another Perspective

感動とビジネスの両立で
長崎を元気にしたい。



関係性が育みやすく、報告・連絡・相談もしやすい。でも今回のように、様々な立場の外部の人たちと、ひとつのものをつくり上げていく時、その成果はチームが本当の意味で「ワンチーム」になれるかに懸かっている。そういう意味でも、プロジェクトを構成する会社を選んだ時点で、結果の成否は半分決まっているようなところがあります。「長崎スタジアムシティ」は、戸田建設さんを最初にきちんと選べたことが本当に大きかったと、改めて今、思っています。



Build the Culture.

人がつくる。人でつくる。

戸田建設がつくるのは、建設物だけではありません。

思い出や文化を生み出す、「人の営み」をつくっています。

周りの街のにぎわい、地域の産業、地球の環境にいたるまで。

人の営みを思うとき、建設が貢献できる領域は、無数に存在しています。

それは、「人がつくる。人でつくる。」からこそできること。

さまざまな分野の人たちと手を取り合って

私たち戸田建設の仕事は、これからも広がりつづけます。

TODA CASE Special Invitation ARCHIVE

01



TODA BUILDING

ビルと街の境目をなくす
人の行き来は、ずっと自由になる

02



アグリサイエンスバレー 常総

農業の6次産業化を軸に
地域の可能性をつくる

03



網島トンネル

街の活動を止めずに、
街の動脈を生み出す

04



グリーンオフィス棟 (筑波技術研究所)

CO₂を出さないを超えた
CO₂を減らす建築

